

学会誌・論文誌の在り方について



筑波大学 教授
伊藤 誠

本年度、学会誌・論文誌在り方WGなるものが立ち上がり、筆者が取りまとめをしています。なぜこの時期に、学会誌・論文誌の在り方を改めて議論しなければならないのか、この機会に会員の皆様にお知らせしておきたいと思っています。ちょうど、前号（49巻2号）の巻頭言において、現副会長鈴木知道先生も論文誌にまつわる課題を示されたところですが、それを少し詳しくご説明します。

これは、昨今の大学が置かれている状況に関連する話です。大学とは不思議なところで、「顧客」がはっきりしません。教育サービスを提供する組織であるのとらえるならば、学生（ないしその保護者の皆様）が顧客ということになります。他方、卒業生を「商品」として企業等に提供する、という見方もできます。さらには、研究を通じて新たな「知」を社会に提供するという立場もあり、この立場では、学生は研究チームの仲間であり、場合によっては従業員ですらあり得ます。とくに、研究型の国立大学の場合、国民の皆様からお預かりした税金を大部分原資として、研究活動を行っていますので、顧客は「国民」といえるかもしれません。

このため、良い大学がどうかを「顧客にどの程度支持されているか」で評価することは本質的に困難であり、多様な観点を考慮した第三者の評価とそれに基づくランキングが重要となります。そうしたランキングは国内外様々にありますが、少なくとも研究型大学では、このランキングはグローバルなものであり、国に依存せず共通して評価できる観点として、国際誌に掲載された論文の質と量がKPIを構成する要素として重視されます。

教員の採用・昇任人事に関しても、この大学のランキングを向上させる貢献を果たせるか・果たしているかが重要な観点となってきています。このため、最近では、和文で発表された論文は存在価値を認められない場合があります。また、国際誌といっても、当該分野で国際的に高い価値が認められた論文誌に掲載されなければ意味がないと評価されるようになってきています。

こうした情勢を踏まえ、研究型大学の先生方にとっては、とくにこれからポジションを得ていこうという若手の研究者の皆さんにとっては、著名な国際誌に論文を発表することが極めて重要なミッションとなっています。ただでさえ品質管理に関する研究者は減りつつある（これも、大型研究予算を獲得しづらい分野であるが故の見かけの貢献度の低さに起因するところがあると言わざるを得ません）中で、アクティブに研究している人ほど本会論文誌以外のところで発表しようとする傾向が強まるという次第です。

学会は、知を創出し、それを発表・アーカイブしていく役割を社会的に果たしていくことが重要なミッションです。本会としても、国際的なプレゼンスが認められた雑誌を運営していくことがどうしても必要になってきます。現在、そのための具体的な取り組みを検討しています。もちろん、企業の品質技術者を中心として、母国語たる日本語で深く議論できる場も引き続き重要です。これは、国際性を高めることと、日本における品質技術を深めていくことを、限られたリソースの中で両立していくというチャレンジです。